

魔性と母性の融合した女

泉鏡花『高野聖』

明治三十三年に発表された小説である。帰省途中の「私」は、汽車の中で僧侶宗朝と道連れになり、宗朝が若い頃に飛騨から信州へ山越えをした際の体験を聞く。宗朝は蛇や山蛭に苦しんだ末に、山中の一軒家に辿り着く。そこには怪しく美しい女が夫らしい男と老人と共に住んでいた。女はもと医者娘だったが、十三年前の洪水で村が全滅したときに生き残り、魔力を得て、欲望のために旅人を留めては獣に変える魔性の女であった。しかしその一方で、同居する男を骨身を惜しまず世話するという母性的な優しさも持っていた。

水を操る異界の女は、九歳で死別した母親と結びつく存在であり、そこには母胎や死のイメージがあるとされている。我々の世界では、文明や科学が発展すればするほど神秘性や非合理性が追い払われ、そのため人間は傲慢になっていく。自然への畏怖や人間の弱さを時として思い出すことも大切である。

〈竹内聡〉

平凡に生きることの大切さ

田山花袋『田舎教師』

明治四十二年刊行の、自然主義作家花袋の小説である。熊谷の旧制中学を卒業した林清三は、家庭の貧困から進学を断念し、家計を支えるために近村の小学校の代用教員になる。明星派や島崎藤村に熱中する清三は、上級学校へ進む友人たちへの羨望もあって、田舎教師の境遇に屈折した思いを抱く。同人雑誌の廃刊や淡い失恋といった挫折を味わい、通いつめた遊郭の女に去られ、念願だった上野音楽学校受験にも失敗する。失望感の中で、平凡に生きることの価値を知り静かな生活を送る決意をするが、既に身体は結核に冒されており、清三は日露戦争の戦局と併せて二十四歳で亡くなる。

都会で立身を目指す生活と地方で平穏に暮らす生活との葛藤が貧困から生じている点で、夏目漱石の作品とは異なる視点を持つ。利根川の東側を舞台にした、関東の四季の描写が美しい。

〈竹内聡〉

体制変化に翻弄された人間たち

森鷗外『阿部一族』

大正二年に発表された歴史小説である。寛永十八年春、肥後藩主細川忠利の病死にあたり十八人の家臣が殉死した。阿部弥一右衛門には殉死の許しが出なかった。切腹できなかつた弥一右衛門の臆病をなじる噂が立ち、彼は直ちに切腹する。だがその跡目相続の処分は、他の殉死者とは差別された。立腹した嫡子権兵衛は、忠利一周忌に霊前で髻を切った。彼は新藩主光向に縛首され、次男ら阿部一族は光向の処置に武門の意地をかけて反抗し、屋敷内に立て籠った。一方、侮辱を受けて討手の総大将にさせられた竹内数馬は自ら討たれた。隣家の柄本又七郎は、指示なく昵懇の阿部家を討つ。激戦の末、一族は全滅した。

封建武士の意地に生きながら、江戸初期の社会体制の変化に翻弄され不条理に潰されていく武士たちの悲劇を描いた点で、『五重塔』の「輝ける意地」とは異なる。「歴史其儘」の史実再現小説でない点も指摘されている。

〈竹内聡〉

恐怖と不安で彷徨う「僕」

芥川龍之介『歯車』

昭和二年に一部が発表され、作者自殺後遺稿として全文が発表された短編小説である。「僕」は知人の結婚披露式に出席するため停車場に向かうが、その自動車の中でレエン・コオトを着た幽霊が出るという話を聞く。待合室にはレエン・コオトの男がいた。列車の中でも、向い側の席にレエン・コオトを着た男が座る。披露宴後、ホテルの廊下の長椅子にもレエン・コオトが脱ぎかけてあった。部屋に入ると、姉の夫がレエン・コオトを着て轢死したと知らされる…。「僕」は自分の視野に常につきまとう半透明の歯車に悩まされ、恐怖と不安に駆られて東京の街を彷徨う。自殺した昭和二年の初めに、ホテルで執筆し発表した数編の小説の一つである。自己の体験を基にしながら、随所に巧みな暗合の「方法」を駆使している。高い虚構性を持った作品で、自殺を意識しながらも、最後まで創作意欲を失わなかった作者の魂を感じさせる。

〈竹内聡〉

清々しい愛情に満ちた初恋文学

川端康成『伊豆の踊子』

大正十五年に発表された短編小説である。川端は新感覚派の作家と位置づけられるが、この小説冒頭の簡潔で的確な自然描写に、その冴えを見ることができる。二十歳の第一高等学校生の「私」は、歪んだ孤児根性から脱出しようとして旅に出る。旅芸人の一行と修善寺で会い、天城峠から下田まで道連れになる。十七歳に見えた薫という名の踊子に恋心を抱く

「私」は、彼女が十四歳であるということを知り、むしろ心が洗われていく。「私」を「いい人ね」と言う踊子たちの言葉を聞き、救われた思いをするが、果たされることのない再会を約束して「私」は伊豆を離れる。

旅で見知らぬ人と出会うのは、楽しいものだ。作者の体験を基にして生れた作品であるが、青年男女の淡い恋を清々しく謳いあげするために、作者は事実を美化して描いている。それは、それまでの川端の現実が非情であったということの現われなのであろう。

〈竹内聡〉

深い愛情か、冷めた批判か

太宰治『ヴィヨンの妻』

昭和二十二年に発表された小説である。実家から勘当された三十歳の大谷は、詩人フランソワ・ヴィヨンの論文を発表する詩人であるが、小料理屋の飲食代を三年間踏み倒し、さらに売上金まで盗んでいた。二十六歳の妻は、夫の借金を返すためにその店で働く。軽やかに働く妻は希望を失わず、夫を献身的に愛する。放蕩詩人であったヴィヨンを夫と重ね、妻の独白体で描いた作品である。

破産者の大谷を無限に許す妻の姿は、無頼派作家太宰にとっても理想的な女性像であつたらう。太宰は生前四回の自殺未遂事件を起こしているが、その三回には女性が関係している。太宰は女性なしでは生きられ（死ね）なかったのか。が、「人非人でもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ。」と言う妻に、男を冷たく突き放して戦後の混乱を生きる女性の気概を見ている、太宰自身の視点があることも考えさせられる。

〈竹内聡〉

桜がもたらす狂気と孤独

坂口安吾『桜の森の満開の下』

昭和二十二年に発表された小説である。昔、鈴鹿峠の桜の森に住む山賊は、桜の花の下に来ると気が変になり、恐ろしさを感じていた。美しい女を強奪して妻にするが、山賊は都で人間の首を集め、妻は首遊びをして暮らす。やがて山賊は、妻と共に山に帰る。桜の森の満開の花の下まで来ると、女は鬼となり、山賊は必死になって鬼の首を絞める。死んだ女と山賊の上に桜の花びらが散りかかり、二人の姿はかき消えて、花と虚空に包まれる。

人間は心に狂気を持つ孤独な生き物であり、「人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な道はない」（『墮落論』）と、混乱と虚無に人間の回復を求めた坂口の思想が、この幻想小説にも現われている。山賊が恐怖の女の残忍性に惹かれるのは、人

間が喪失した何かに惹かれるからなのであって、無垢＝虚空とは人間の生死を超越したものの存在を示しているのではないか。

〈竹内聡〉

美に対する愛と憎しみ

三島由紀夫『金閣寺』

昭和三十一年に発表された小説である。日本海の辺鄙な岬の寺に生れた溝口は、父親が美の象徴としていた金閣寺の徒弟になる。太平洋戦争の空襲による金閣焼失を望む溝口にとって、金閣は悲劇的な美しさを増していくものであった。しかし戦争を無事に切り抜けた金閣は、溝口にとって憎悪の対象へと変わり、その完璧な美しさを永遠に守るべく焼かねばならぬと溝口は決意する。

この小説は昭和二十五年に金閣が放火され焼失した事件に基づくが、寺を放火するまでの溝口の心理には、作者三島の美学が現われている。愛憎の果てに「到達不可能なもの、自分だけのものが美しい」という観念は、谷崎の『春琴抄』で、佐助が自らの目を針で突き、盲目の世界で美しい春琴を見るという姿に通じるものがある。正邪の違いはあっても、芸術作品は美しくなければならぬ。文学はそれを文字で表すべく、生れたのである。

〈竹内聡〉

一粒の麦が多く、の果を結ぶまで

三浦綾子『塩狩峠』

昭和四十一年に発表された小説である。東京で生れた永野信夫は、二十歳になり、親友吉川と十年ぶりに再会する。そして彼は二十三歳で単身北海道へ渡り、吉川と同じ鉄道会社に勤務する。その後信夫は洗礼を受け、熱心なキリスト教信者になった。五年後彼は、障害を持ち結核に冒されながらも明るくいふじ子（吉川の妹）と結婚の約束をする。結納の日、札幌へ向かう信夫の乗った汽車が、塩狩峠で突然後退し始めた。汽車を止めるべく、彼が決断した最後の手段は…。

明治四十二年に塩狩峠で実際に起きた列車事故に取材しているが、登場人物の生き様は、作者の造型である。私は高々生時代にこの小説を読み、漠然と北海道の地を思った。その後札幌の大学を卒業し、社会人になってから塩狩峠を訪れた。この職業について以来、推薦書として何度か挙げた作品である。今ある自分の生活は、北海道なしには存在しない。

〈竹内聡〉

宇宙や自然との呼応と調和

池澤夏樹『スティル・ライフ』

昭和六十二年に発表された、芥川賞受賞小説である。「ぼく」はアルバイト先で知り合った佐々井と、星や化学について語り合う。ある日、佐々井は「ぼく」に株の話を持ちかけ、株で横領金の返済を手助けすることを頼む。「ぼく」は佐々井の指示通りに動き、返済は完了する。そして佐々井は「ぼく」の前から姿を消す。「ぼく」は佐々井が残していった写真を見ながら、佐々井の存在が遠く微小な天体になっていく感じを味わう。

遠大な時間と空間を持つ宇宙や自然の法則に対し、中間距離しか取ることのできない人間世界が、対照的に描かれる。作者は大学で理工学部にて在籍し、中退後はギリシャに滞在した。硬質で透徹した視点で描かれたこの小説で、人間世界の卑小さや限界を作者が描いた点には、老荘思想に通うものがある。理系も文系もなく、それが渾然一体化する世界が文学にはあるのだ。

〈竹内聡〉